



TITLE:

スピノザの人間形成思想と自己保存の努力

AUTHOR(S):

中井, 裕之

CITATION:

中井, 裕之. スピノザの人間形成思想と自己保存の努力. 京都大学大学院
教育学研究科紀要 2001, 47: 160-171

ISSUE DATE:

2001-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57415>

RIGHT:

スピノザの人間形成思想と自己保存の努力

中 井 裕 之

Spinoza's ideas on human formation and "conatus"

NAKAI Hiroyuki

は じ め に

教育は一方で個的な人間形成にかかわるがゆえに「私的」な側面を持つが、他方でその人間形成は私的なものに閉ざされてはならず、公共的なものへと向かわなければならないがゆえに「公的」な側面も合わせ持つ。教育（学）の古くて新しい問題の一つに、教育の個別性と公共性の問題がある。前者は教育の個別的課題要求であり、後者は普遍的課題要求であるとも言えよう。教育（学）においては教育のこの両側面の関係をいかに問うかが問題となる。

本稿では、人間形成における個別性と公共性を繋ぐ概念として、17世紀にオランダで活躍した思想家、スピノザ（Benedictus de Spinoza, 1632–1677）の、コナトゥス（conatus）論に着目し、個的な人間形成が本質的に公共性へと向かうその原理論を提示することを試みる。スピノザによれば、「コナトゥス」とは、「すべてのものが、神的本性の必然性によって決定づけられていて、一定の仕方では、存在し、活動しようとしている（omnia ex necessitate divinae naturae determinata sunt ad certo modo existendum, et operandum.）」（Eth. I, Prop. 29: II-S. 70）⁽¹⁾ ということをし、つまり、「各々すべてのものが、自己の存在を保持しようと努める、その能力、ないし努力（[cujuscunque rei] potentia, sive conatus, quo in suo esse perseverare conatur,）」（Eth. III, Prop. 7, Demonstr.: II-S. 146）⁽²⁾ のことをいう。

コナトゥス（conatus）はラテン語で「努力」、「試み」あるいは「衝動」を意味するが、スピノザの思想においては、「自存力」、「自己保存の努力」を示す概念であり、それは人間の「現実的本質（actualis essentia）」とされる。スピノザにおいて「自己保存の努力（コナトゥス）」⁽³⁾ は、彼の思想の中心的役割を果たす。ところが、そもそもスピノザの思想そのものがこれまで教育学の領域では研究されることがほとんど無かったために、そのコナトゥス論は人間形成論の文脈の中で受け取られては来なかった⁽⁴⁾。そこで、本稿では彼のコナトゥス（conatus）論を人間形成の原理論として読み解くことを行う。「自己保存の努力（コナトゥス）」を人間形成論の中心概念として析出するのである。そしてそれが個別性と公共性を繋ぐ人間形成の原理論として一つの有効な可能性を持つことを示したい。

よって、ここでは、人間形成という視点から、スピノザの「自己保存の努力（コナトゥス）」の役割と特質を論述していきたいわけであるが、まず、スピノザにおける人間の完成と「自己保存

の努力（コナトゥス）」との関係を押さえた上で、「自己保存の努力」の特質を、特に、オランダ語写本の形でのみ残されたスピノザの処女作、『神、人間および人間の幸福に関する短論文（Korte Verhandelng van God, de Mensch en deszelfs Welstand）』—以下『短論文』と略す—⁽⁵⁾に基づいて明かにしていきたいと思う。というのも、この著作において、「自己保存の努力」（オランダ語で「ポヒング」と表されている）そのものの具体的規定が与えられているからである。

I. 人間の完成と自己保存の努力

スピノザは、「おのおののものが自己の存在に固執しようと努める自己保存の努力（コナトゥス）」はそのものの現実的本質に外ならない（*Conatus, quo unaquaeque res in suo esse perseverare conatur, nihil est praeter ipsius rei actuaalem essentiam.*）」（*Eth.* III, Prop. 7 : II-S. 146）とし、「自己保存の努力（コナトゥス）」を人間（およびあらゆるもの）の現実的本質と捉える。これはスピノザが「神⁽⁶⁾」のみを唯一の実体⁽⁷⁾とし、あらゆるものをこの神の様態⁽⁸⁾とすることからくる。あらゆるものは「神」を一定の仕方では表現する（*exprimo*）のであり、自己の存在のうちに自己の存在を滅するようなものは有していないのである（*cf.* *Eth.* III, Prop. 6 *et* *Demonst.* : II-S. 146 ; *Eth.* III, Prop. 7, *Demonst.* : II-S. 146）。あるいは別の言い方をすれば、後に見るように、それはあらゆるものが神の摂理のうちにあるということである。では、このように人間の現実的本質を捉えるならば、スピノザにとって人間の完成は「自己保存の努力（コナトゥス）」とのかかわりにおいていかなるものと捉えられるのだろうか。

人間の現実的本質が上述のようなものである以上、人間の完成はそうした自己の本質性を開示すること、神の摂理のうちにある自己を体現することとしてある。スピノザにおいて、人間の完成とは、「自己保存の努力（コナトゥス）」を人間が最大限に発揮することであり、そしてそれはまた、人間の徳（*virtus*）であるとも言われる（*Eth.* IV, Prop. 18, *Schol.* : II-S. 222 ; *Eth.* IV, Prop. 22 *et* *Crol.* : II-S. 225）。「徳の基礎は自己の存在を保存しようとする努力そのものであり、また幸福は人間が自己の存在を保存し得ることに存する（*virtutis fundamentum esse ipsum conatum proprium esse conservandi, et felicitatem in eo consistere, quod homo suum esse conservare.*）」（*Eth.* IV, Prop. 18, *Schol.* : II-S. 222）。スピノザは「自己の存在を保存し得ること」、つまりコナトゥスの実現を、人間の完成と捉えているのである。

だが、ここで注意を要するのは、それは自己保存の努力（コナトゥス）を発揮することであり、そうした努力を自ら行うことではないということである。「個物が、したがってまた人間が、自己の存在を保存（*conservo*）する能力は、神あるいは自然の能力そのものである」（*Eth.* IV, Prop. 4, *Demonst.* : II-S. 213 ; *cf.* T. P. Cap. 2, § 4 : III-S. 277）からである。ここにドゥルーズ（Gilles Deleuze, 1925–1995）のスピノザ研究における次の言葉の意味も理解出来る。「『エティカ』の全体は義務の理論としての道徳論とは全く異なり、能力の理論として提示されている（*Toute l'Éthique se présente comme une théorie de la puissance, par opposition à la morale comme théorie des devoirs.*）」⁽⁹⁾。義務は自己が自己に対して課すものであるが、能力は自ずから発揮されるものである。要は、能力がいかに適正に発揮されるかである。

さて、スピノザは、「……人生において何より有益なのは、知性ないし理性を出来る限り完成する

ことであり、そしてこのことにのみ、人間の最高の幸福ないし至福は存する」(Eth. IV, Appendix, Cap. 4 : II-S. 267)⁽¹⁰⁾ という言い方をし、こうしたコナトゥスの発揮としての人間の完成のためには、知性の改善により、より優れた認識を得ることが必要であるとす。「何よりもまず、知性を正し、そして清められ得るところまでそれを浄化し、知性が、容易に、誤りなく、出来る限りよく、事物を認識出来るようになる方法を考え出さなければならない」(D. I. E. 16 : II-S. 9)。というのも、より優れた認識により自己の本性を見出し (cf. K. V. II-Cap. 26 : I-S. 112 ; D. I. E. 13 : II-S. 8), 正に自己保存の努力 (コナトゥス) を実現するからである。ここにスピノザの人間形成論は認識の発展段階論の形を取ることになる (K. V. II-Cap. 4 : I-S. 61 ; K. V. II-Cap. 26 : I-S. 109 ; D. I. E. 31 : II-SS. 13-14)。スピノザにおいては、認識の発展の過程は人間の発展の過程なのであり、この認識の発展は自己保存の努力 (コナトゥス) の実現の課程として理解されている。つまり、人間形成はスピノザにおいて、自己定立的に、自己を自ら形成することではなく、自己を発見し保持して (persevero) いくこととして、真の自己を獲得して行く認識の発展過程としてあるのである。それは「自己の存在を保存する能力」の実現課程である。

II. 人間の完成と真の認識

スピノザは言う。「今や私が全ての知 (scientiae) をひとつの目的およびひとつの目標に、すなわち先に述べた、人間の最高の完成 (summa humana perfectio) への到達に向けようとしているのを認め得るだろう。それゆえ、知において我々を何らこの目的へと進めないものは全て、無用なものとして退けられるべきであろう。すなわち、一言で言えば、我々の全ての活動と思想は、この目的へ向けられるべきである」(D. I. E. 16 : II-S. 9) と。このようにスピノザにとってその思想の目的は人間の完成にあるが、『短論文』においてそれは最高の認識としての「真の認識 (waare kennisse)」への到達に求められる。「我々の追い求める究極の目的、そして我々の知る最高目標は、真の認識である (het laatste eynde dat wy zoeken, en het voornaamste dat wy kennen, is de waare kennisse.)」(K. V. II-Cap. 4 : I-S. 61)。

スピノザは人間の認識を『短論文』の中で次の三種に分類している⁽¹¹⁾。「臆見 (waan)」, 「信念 (geloof)」, 「明瞭な認識 (klaare kennis)」の三種である (K. V. II-Cap. 1 : I-SS. 54-55)。まず、「臆見」は「伝聞 (hoorenzeggen)」と「経験 (onderwinding)」から生じる認識であり、それは日常的な認識である。しかしこの「臆見」は、具体的な認識ではあるが、単なる主観的な思い込みに過ぎず、「常に疑わしく、誤謬 (dooling) に従属する」(K. V. II-Cap. 4 : I-S. 59)。次に、「信念」は諸根拠 (reedenen) に基づく確信 (overtuyging) であり、推論 (reedenering) の認識である。それは、諸根拠に基づくがゆえに客観的、普遍的であり、「明瞭な認識」と同様に「誤る (doolen) ことはあり得ない」(K. V. II-Cap. 1 : I-S. 54)。ところがこの「信念」は、「単に、事物が何であるべきかを我々に教えるだけで、事物が何であるかは教えはしない」(K. V. II-Cap. 4 : I-S. 59)⁽¹²⁾ のであり、それは間接的で具体性を欠く認識である。最後に、「明瞭な認識」は「何か他のものの結果からではなく、事物自身の知性への直接的顕現によって生じる」(K. V. II-Cap. 22 : I-S. 100)⁽¹³⁾ 認識であり、それは推論を介さない直接的で具体的、かつ普遍的な認識である。スピノザは「臆見」から「信念」へ、そして「明瞭な認識」へと高い評価を与えてゆき⁽¹⁴⁾,

「明瞭な認識があらゆる認識の中で最高完全の認識 (de aldervolmaakste)⁽¹⁵⁾ である」(K. V. II-Cap. 4 : I-S. 61) とする。「明瞭な認識」こそが、スピノザのいう「真の認識」である。

「明瞭な認識」が最高の認識であるとされるのは、それが「諸根拠に基づく確信においてではなく、事物自身との直接的合一において (in een onmiddelyke vereeniging) 成り立つ」(K. V. II-Cap. 4 : I-S. 59) 認識、『知性改善論⁽¹⁶⁾』の表現を借りれば、「精神と全自然との合一の認識 (cognitio unionis, quam mens cum tota Natura habet)」(D. I. E. 13 : II-S. 8) であるからである。「明瞭な認識」において認識は全自然そのものとなっているのである。

スピノザによれば認識はこの合一へ向けて、「臆見」から「信念」へ、そして「明瞭な認識」へと、つまり主観的な思い込みから、客観的な信念へ、そして「精神と全自然との合一の認識」へと発展する。それは認識が、自己そのもの、自然そのものを捉えてゆく課程であり、自己そのもの、自然そのものとなってゆく過程である。別の言い方をすれば、認識が神の摂理そのものへと近づいてゆく過程である。これをスピノザは人間の完成への過程と考えている。

認識の発展過程は、自然＝本性 (natuur [蘭], natura [羅]) により近づくということである。そして自然そのもの、自己そのものとの合一が最高の認識、「真の認識」とされる。それは、「我々の知性が神との直接的な合一によって獲得する確固たる本質性であり、自らのうちに自己の本性と全く一致する諸観念を生み出し、自らの外に自己の本性と全く一致する諸結果を生み出し得る状態 (een vaste wezentlykheid, de welke ons verstand door de onmiddelyke vereeniging met God verkrygt, om en in zig zelve te kunnen voortbrengen denkbeelden, en buyten zig zelve gevrogten met syn natuur wel overeen komende)」(K. V. II-Cap. 26 : I-S. 112) である。「真の認識」においては、その認識自体も行為も、自然＝本性に一致したものとしてある。人間がその「確固たる本質性」を示し、本来的な自己として生きるということは、人間が自己の自然＝本性を真に認識し、それそのものとして生きるということである。「真の認識」が人間の完成とされるのは、それが自己の本質性との合一であるからであり、それはほかならぬ自己保存の努力 (コナトゥス) の実現であるからである。

Ⅲ. 『短論文』に見る自己保存の努力の特質

『短論文』は、スピノザの処女作であるが、それは『小エティカ』とも呼ばれるように後に完成される主著『エティカ』の根本思想をあらまし含んだものである。よって、『短論文』の思想が彫琢され、より洗練されたものが『エティカ』であるといえる。したがって我々は、『短論文』の中に、『エティカ』の思想の原型を見出だすことが出来る。だが、『エティカ』には見出だされない、自己保存の努力 (コナトゥス) そのものの特質についての叙述が『短論文』にはある。我々はそれに着目したい。

『短論文』は現在、二種のオランダ語写本のみが残されており⁽¹⁷⁾、ラテン語での記述がないために、「コナトゥス (conatus)」というラテン語の言葉そのものは、この著作の中に見出だすことは出来ない。ところが、『短論文』においては、「全自然および個物に見出だされる、自己の存在を維持し、保存しようとする努力 (poging, de wy en in de geheele Natuur, en in de bijzondere dingen ondervinden, strekkende tot behoudenis, en bewaaringe van haar zelfs wezen.)」

(K. V. I-Cap. 5 : I-S. 40) という記述があり、これが『エティカ』の「コナトゥス」に対応する。すなわち、『短論文』ではラテン語の「コナトゥス (conatus)」に代わって、オランダ語で「ポヒング (poging)⁽¹⁸⁾」と記述されているのである。そしてスピノザは『短論文』においてそれを神の「摂理 (Voorzienigheid)」であると規定する。つまり我々は『短論文』において、自己保存の努力 (ポヒング) が神の摂理であるという規定を見出だすことが出来るのである。

さて、スピノザはこの神の摂理に、「普遍的摂理 (algemeene Voorzienigheid)」と「個別的摂理 (bezondere Voorzienigheid)」の二つの側面を認める。つまり、自己保存の努力 (ポヒング) は、普遍的性格と個別性格を合わせ持つのである。彼は言う、「……我々は普遍的摂理および個別的摂理を認める。普遍的摂理とは、各々の物 (zaak) が全自然の諸部分である限りにおいて創造され (voortgebracht), 保持される (onderhouden) そうした摂理である。個別的摂理とは、各々の個物 (ding bijzonder) が、自然の一部分としてでなく、一つの全体として見られる限りにおいて持つ、自己の存在を保存 (bewaaren) しようとする努力 (ポヒング) である」(K. V. I-Cap. 5 : I-S. 40)⁽¹⁹⁾ と。スピノザにとって自己保存の努力は、個そのものの自己完成の追求でありつつ同時に、それは自然全体への寄与である。個は自己保存の努力において、自己みずからが一つの全体として自己の完成を目指すと同時に、自然の一部分として自然全体の完成を目指す。自己保存の努力においては個そのものの完成と自然全体の完成が同時に目指されているのである。あるいはこう言っても良いかもしれない。個はみずからが一つの全体として完成を目指すと同時に、個は自然の一つの部分としてもその完成を目指すのであると。したがってスピノザの自己保存の努力、あるいはそれに基づく人間形成は決して単なるエゴイズムではない。かといって、個が自己を犠牲にして全体の完成を目指すものでもない。自己を完成しようということと自然の一部としてその役割 (自己の役割) を果たそうとすることは、結局、神の摂理の体现ということとして一つのこととして考えられているのである⁽²⁰⁾。スピノザはそれを次の例をもって説明する。「人間の四肢は、人間の部分である限りにおいて、摂理され (voorzien), そして配慮される (voorzorgt)。これが普遍的摂理である。個別的摂理は、手足の各々が (人間の一部分としてではなく、一つの全体として) 有する、それ自身の幸福 (welstand) を保存し (bewaaren), そして保持 (onderhouden) しようとする努力 (ポヒング) である」(K. V. I-Cap. 5 : I-S. 40)⁽²¹⁾。自己保存の努力において、個別要求 (個別性) は同時に普遍的要求 (公共性) なのである。

よって、スピノザにおいて個の完成は本来的に公共的なものである。個の完成は全体の完成でもある。それゆえスピノザの目は一方で人間形成の問題へ向かうと同時に、他方で政治の問題へも向かう。全体の完成もまた個の完成を意味するからである。人間形成と政治の両者はともに、個的かつ全体的完成を目指すこととしてスピノザにおいて重なり合う。人間形成と政治は、人間の完成 (スピノザにおいては個的かつ全体的完成を意味する) という一つの実践的問題に対するアプローチの違いに過ぎない。

IV. スピノザ思想の二つの柱

スピノザが生涯に残した著作としては、小品、未完のものを含めて、現在、9つのものが見出だされている。つまりそれは、(1)『神、人間および人間の幸福に関する短論文』(1658-1660

or 1661 年頃の執筆, 19 世紀後半に発見される) —『短論文』—⁽²²⁾, (2)『知性の改善に関する, ならびに知性が最もよく事物の真の認識に導かれる方法に関する論文(Tractatus De Intellectus Emendatione, Et de via, qua optime in veram rerum cognitionem dirigitur)』(1661 or 1662 年頃の執筆, 1677 年出版, 未完) —『知性改善論』—⁽²³⁾, (3)『幾何学的方法で証明されたルネ・デカルトの哲学原理, 第 1 部および第 2 部 / (付録) 形而上学的思想(Renati Des Cartes Principiorum Philosophiae Pars I, et II, More Geometrico demonstratae. / Cogitata Metaphysica)』(1662-1663 年執筆, 1663 年出版) —『デカルトの哲学原理』—⁽²⁴⁾, (4)『神学・政治論(Tractatus Theologico-Politicus)』(1665-1670 年執筆, 1670 年出版)⁽²⁵⁾, (5)『幾何学的秩序で証明されたエティカ(Ethica, ordine geometrico demonstrata)』(1662 年頃より執筆開始, 1675 年完成, 1677 年出版) —『エティカ』—⁽²⁶⁾, (6)『政治論(Tractatus Politicus)』(執筆は 1675 年よりスピノザ没まで, 1677 年出版, 未完)⁽²⁷⁾, (7)『ヘブライ語文法綱要(Compendium gramatices linguae hebraeae)』(執筆は『政治論』と同時期, 1677 年出版, 未完)⁽²⁸⁾, (8)「自然科学と数学とを密接に結び付けるのに役立つ虹の代数計算(Stelkonstige Reeckening van den Regenboog, dienende tot naedere samenknoping der Natuurkunde met de Wiskonsten)」(執筆は 1675 年以降, 1687 年に発見される) —「虹の代数計算」—⁽²⁹⁾, (9)「機会の計算(Reeckening van Kanssen)」(執筆は 1675 年以降, 1687 年に発見される)⁽³⁰⁾ である。なお、(1) から (9) までの順は執筆年代の順である。これに加え、86 通のスピノザ往復書簡が現在知られている(うち、49 通がスピノザからのもので、37 通がスピノザ宛のものである)⁽³¹⁾。

上で挙げた著作のうち、(1) から (3) までは、スピノザが、1656 年のユダヤ教会からの破門後、生地アムステルダム(Amsterdam)を離れ、レイデン(Leiden)近郊の村で、コレギアント派⁽³²⁾の本拠地でもあった、レインスブルフ(Rijnsburg)に在住していた時代(1660-1663) —レインスブルフ時代—⁽³³⁾の著作で、初期の著作と見なすことが出来る。(4) は、彼がハーグ(Den Haag)近郊のフォールブルフ(Voorburg)に在住していた時代(1663-1670) —フォールブルフ時代—の著作で、中期の著作と見なせる。また、(6) から (9) までは、スピノザが彼の 44 年と 3 カ月の短い人生の幕を閉じる終焉の地ハーグに在住した時代(1670-1677) —ハーグ時代—の著作で、後期の著作と見なせる。なお、(5) は、レインスブルフ時代より執筆が開始されているが、その完成は 1675 年であるので、それをハーグ時代を含め、後期の著作と見なすこととする。

これらの著作は、大きく、次の四つのグループに分けることが出来る。すなわちそれは、第一に、(1), (2), (5) の人間形成を主題とした著作のグループ—人間形成論—, 第二に、(4), (6) の政治を主題とした著作のグループ—政治論—, 第三に、(8), (9) の自然科学および数学を主題とした著作のグループ—自然科学論—⁽³⁴⁾, そして第四に、(3), (7) の彼自身の思想を純粋に展開したものではない著作のグループ—解説書—である。

実は、第四のグループ—解説書—の著作のうちにも、スピノザ自身の思想はやはり反映されていると見られるのだが⁽³⁵⁾, (3) はデカルトの思想および新スコラ学の解説を、そして(7) はヘブライ語の文法の解説を主眼とした著作であるので、スピノザ自身の論を展開した著作としては人間形成論, 政治論, 自然科学論の三種ということになる。

ここで、自然科学論として分類される「虹の代数計算」, 「機会の計算」は、極めて小さな論文

にすぎないので、少なくとも著作物の全体像に見出だされる傾向として、最終的には、人間形成論と政治論とがスピノザの思想の二つの柱と結論付けられる⁽³⁶⁾。

これは別の言い方をすれば、スピノザの思想はとりわけ人間の実践へと向けられていたということである。これは、デカルト (René Descartes, 1596-1650) やライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716) が自然科学に関する著作を多く残しているのとは対照的である。ところで、最初に掲げた、内容からの著作の四分類 (人間形成論, 政治論, 自然科学論, 解説書) を、前期, 中期, 後期の時代の区分に当て嵌めてみると、スピノザは、前期のレインスブルフ時代には、人間形成論と解説書を、中期のフォルブルフ時代には政治論を、そして後期のハーグ時代には人間形成論, 政治論, 自然科学論, 解説書を書いている。これを見ても、スピノザの関心が研究生生活のあらゆる時期を通じて常に実践 (人間形成, 政治) に向けられていたことが分かる。スピノザにとって重要なのは、真理よりもむしろ実践であった。そしてこの実践の問題は人間形成と政治という二つの方向から考察されたのである。

このスピノザにおける実践への志向の背景には、1656年のユダヤ教会からの破門の経験が考えられる。破門によるスピノザのユダヤ社会からの離脱と孤立は、彼に、いかに生きべきかと言う問題をまさに切実な問題として提起したであろうからである。そして、彼は、人間の完成の意味を再考し、それを、人間が自然＝本性のままにあること (コナトゥスの実現) に見出だそうとした。彼はいかなる外的要因によっても揺らぐことのない確固たる人間の完成を求めたのである。実際彼は、破門後のレインスブルフ時代より、人間の完成を求める彼の哲学的探求を開始している。この探求は人間形成論と政治論の二つの形を取るが、両者はコナトゥスを論の中心としているのである。

V. コナトゥスの実現としての人間形成と政治

人間形成論においては、人間の生命的本質が論の基盤となるが、それはスピノザによれば自己保存の努力 (コナトゥス) であるとされる。一方、政治論においては、今度は、人間の政治的本質が論の基盤となる。ところが、この政治的本質も、やはりそれが人間の本質である以上、人間形成論と同様にそれは自己保存の努力 (コナトゥス) であるとされる。例えば『政治論』の中では、「自然の能力そのもの (ipsa naturae potentia)」(T. P. Cap. 2, § 4 : III-S. 277), あるいは「各々の自然物が、存在し、活動する能力 (uniuscujusque rei naturalis potentia, qua existit, et operatur)」(T. P. Cap. 2, § 3 : III-SS. 276-277) という表現があるが、これは先に見たコナトゥスの規定に外ならない。ただ政治論においては、それは自然権 (Jus Naturale) と読み替えられることになる (T. T. P. Cap. 16; T. P. Cap. 2)。人間形成論における人間の生命的本質 (=コナトゥス) が、政治論における政治的本質 (=自然権) となっている。人間形成論は人間の生命的本質である自己保存の努力 (コナトゥス) を全うするものであり、政治論は人間の政治的本質である自然権を全うするものである。前者は人間の「完成 (perfectio)」を目指し、後者は人間の「自由 (libertas)」を目指す。しかし、自然権とは、元来、コナトゥスに外ならないのであるから、人間の完成と人間の自由とは、終局的には、自己保存の努力 (コナトゥス) を全うすることとして、一つのことなのである (cf. K. V. II-Cap. 26; Eth. V; T. P. Cap. 2)。

「我々が、人間を一層自由であると考えれば考えるほど、それだけ一層我々は、人間が自己を必然的に (necessario) 保存しているはずだと判断するよう強いられる……。このことについて、自由と偶然 (contingentia) を混同しない人は皆、容易に私の主張を認めるだろう」(T. P. Cap. 2, § 7 : III-SS. 278-279)⁽³⁷⁾ とスピノザは言う。ここで、スピノザにとって人間の「自由」というものが、人間の「完成」と同様、自己保存の努力 (コナトゥス) を全うすることであり、そしてそれが、自然＝本性 (natura) の「必然性 (necessitas)」に従うことを意味することに注意しておく必要がある (cf. Eth. I, Def. 7 : II-S. 46 ; T. P. Cap. 2, § 7 : III-S. 279)。スピノザは言う、「人間が自由であると言われ得るのは、人間が、人間の自然＝本性の諸法則 (humanae naturae leges) に従って、存在し、活動する力を有する限りにおいてのみである」(T. P. Cap. 2, § 7 : III-S. 279) と。つまりスピノザの言う「自由」とは、自然＝本性の必然性のままにあること、あるいは自然＝本性の必然性に従うこととしてある。そうである以上、彼の言う「自由」は必然性と矛盾するばかりか、それは必然性そのものであるということになる。

自由の意味はスピノザにおいては必然性となる。この意味の中で人間の自由は、人間の完成と重なり合う。「実に、自由とは、徳あるいは[人間の]完成である (Est namque libertas virtus, seu perfectio.)」(T. P. Cap. 2, § 7 : III-S. 279)⁽³⁸⁾。

スピノザは、人間の完成および自由の意味を、自然＝本性の必然性のままにあること (コナトゥスの実現) と捉え、コナトゥスを論の中心として、一方で人間形成論を、他方で政治論を説いた。スピノザにおいて人間形成は個的完成のみを意味するものではないし、また政治は全体的完成のみを意味するものでもない。スピノザの人間形成と政治が目指すのは、コナトゥスの実現なのであり、それはともに個的かつ全体的完成を目指す。

結 び

以上見てきたように、スピノザの「自己保存の努力 (コナトゥス [羅], ポヒング [蘭])」の概念は、人間形成における個別性と公共性をつなぐ一つの有効な原理である。スピノザの論によれば、個的な人間の完成は本質的に公共的なものへと向かう。逆に言えば、公共的な完成なくしては、個としての人間の完成もないということになる。スピノザのコナトゥス論は、教育において、社会のあり方への問い、自然環境のあり方への問いといった、公共的問題への問いなくして、人間の完成は問えないということを示唆している。個の完成と全体の完成を、「自己保存の努力 (コナトゥス)」の実現ということで同時に問うスピノザのコナトゥス論は 21 世紀の教育学にとり大きな可能性を持つものと思われる。

【付記】

*本研究は科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) による研究成果の一部である。

【註】

- (1) スピノザからの引用は全て、*Spinoza Opera*, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, herausgegeben von Carl Gebhardt, Heidelberg: Carl Winter, 1925 (ゲブハルト版全

集)を用いる。註において K. V. は『短論文』を示し、その後に1部、2部の別をローマ数字で、章(Cap.)を算用数字で記す。D. I. E. は『知性改善論 (Tractatus De Intellectus Emendatione)』を示し、その後に便宜のために、ブルーダー版に付された数字を記す。Eth. は『エティカ (Ethica)』を示し、続くローマ数字は第何部かを示す。また、Prop.=定理、Schol.=備考、Crol.=系、Demonst.=証明、Appendix=付録である。T. P. は『政治論 (Tractatus Politicus)』を示す。なお、コロンに続けて、ローマ数字でゲブハルト版全集の巻数を、そしてその後に頁数を記す。例えば、K. V. I-Cap. 5 : I-S. 40 とは『短論文』の第1部・第5章を示し、それがゲブハルト版全集において、第1巻の40頁にあることを表す。書簡番号もゲブハルト版の数字づけによる。引用の訳文は全て筆者自身による。

- (2) ブラケット [] 内は筆者による補いである。
- (3) 'conatus' の訳に関して、河井徳治氏は「'conatus' の訳語については、桂壽一のようにこれを『白存力』と訳す場合もあり、'conatus' の存在論的側面を強調すればこの意味に傾き、人間論的倫理的側面を強調すれば『努力』の意味に傾く」(河井徳治『スピノザ哲学論攷：自然の生命的統一について』創文社、1994年、363頁)と指摘している。本稿では conatus の持つ意味の多様性も考慮に入れつつ、「自己保存の努力」ないし「コナトゥス」と訳す。
- (4) cf. ドーニン・ボルコフスキー編・速水敬二抄「批判的スピノザ文献史」(国際ヘーゲル聯盟日本支部編『スピノザとヘーゲル』岩波書店、1932年、269-310頁)、Jean Préposiet, *Bibliographie spinoziste*, Paris : Les Belles Lettres, 1973.
- (5) 註の(22)参照。
- (6) 『エティカ』においてスピノザは「神 (Deus)」を次のように定義する。「神とは絶対に無限な存在者、つまりその一つ一つが永遠で無限の本質を表現する無限に多くの属性からなる実体、と私は理解する (Per Deum intelligo ens absolute infinitum, hoc est, substantiam constantem infinitis attributis, quorum unumquodque aeternam, et infinitam essentiam exprimit.)」(Eth. I, Def. 6 : II-S. 45)。なお、「実体 (substantia)」の定義については註の(7)を参照のこと。
- (7) 『エティカ』においてスピノザは「実体 (substantia)」を次のように定義する。「実体とは、それ自身においてあり、またそれ自身によって考えられるもの、つまりその概念が形成される際、どうしてもなくてはならないような他のものの概念を必要としないもの、と私は理解する (Per substantia intelligo id, quod in se est, et per se concipitur : hoc est id, cujus conceptus non indiget conceptu alterius rei, a quo formari debeat.)」(Eth. I, Def. 3 : II-S. 45)。
- (8) 『エティカ』においてスピノザは「様態 (modus)」を次のように定義する。「様態とは、実体の変様、あるいは、他のものにおいてあり、また他のものによって考えられるもの、と私は理解する (Per modum intelligo substantiae affectiones, sive id, quod in alio est, per quod etiam concipitur.)」(Eth. I, Def. 5 : II-S. 45)。「実体 (substantia)」の定義については註の(7)を参照のこと。
- (9) Gilles Deleuze, *Spinoza. Philosophie pratique*, Paris : Les Editions de Minuit, 1981, p. 143.
- (10) 《In vita itaque apprime utile est, intellectum, seu rationem, quantum possumus, perficere, et in hoc uno summa hominis felicitas, seu beatitudo consistit;》
- (11) 拙稿「認識論に見るスピノザの人間形成思想—『神、人間および人間の幸福に関する短論文』を中心として—」(『関西教育学会紀要』第23号、1999年、56-60頁)参照。
- (12) 《... zy ons leert alleen wat de zaake behoort te zyn, en niet wat zy is, ...》
- (13) 《... deze manier van kennisse niet en is uyt gevolg van iets anders, maar door een onmiddelyke vertooninge aan het verstand van het voorwerp zelve...》
- (14) cf. K. V. II-Cap. 1 ff. : I-S. 54 ff.
- (15) 'de aldervolmaaktste' は形容詞 ('aldervolmaaktst') の名詞用法。'aldervolmaaktst' は、形容詞 'volmaakt (完全な)' の最上級 'volmaaktst (最も完全な)' を更に強調したものである。よって本稿では、'de aldervolmaaktste' を「最高完全の認識」と訳した。なお、オランダ語原文の《de klare kennisse de aldervolmaaktste is van alle :》(下線は筆者) は、ゲブハルト (Gebhardt) によるマイナー版独訳 (前掲) においては、《die klare Erkenntnis, die allervollkommenste von

- allen ist.》(S. 66, 下線は筆者)と訳されている。
- (16) 註の(23) 参照。
- (17) 註の(22) 参照。
- (18) オランダ語の‘poging’は「努力」, 「試み」(‘endeavour’, ‘attempt’, ‘effort’)を意味する(『講談社オランダ語辞典』講談社, 1994年, ‘poging’の項: 615頁)。更にその動詞形は‘pogen’であり, これは「努力する」, 「試みる」, 「やってみる」(‘endeavour’, ‘attempt’, ‘try’)を意味する(同書, ‘pogen’の項: 615頁)。
- (19) 《... wy ..., volgens deze onze beschryvinge stellen, een algemeene, en een bijzondere Voorzienigheid: de algemeene is die, door de welke ieder zaak voortgebracht en onderhouden word voor zoo veel zy zyn deelen van de geheele Natuur. De bijzondere Voorzienigheid is die poginge, die ieder ding bijzonder tot het bewaaren van syn wezen heeft, voor zoo veel ze niet als een deel van de Natuur, maar als een geheel aangemerkt word.》
- (20) ここに, ライブニッツのモノアド(monade)論との類似性を指摘することが出来る。部分であると同時に全体であるそういった構造をライブニッツは「一」(「モノアド」)と呼ぶ。
- (21) 《Alle de leeden van de mensch worden voorzien ende voorzorgt, voor zoo veel zy deelen van de mensch zyn, het welk de algemeene Voorzienigheid is: en de bijzondere is die poginge, die ieder bijzonder lit (als een geheel, en geen deel van de mensch) tot het bewaaren en onderhouden van syn eigen welstand heeft.》
- (22) 『短論文』は1658-1660(or 1661)年頃に執筆されたと推定されるスピノザの処女作であり, 主著『エティカ』の思想の多くは既にこの著作の中に含まれている。『エティカ』が取るような幾何学的形式(幾何学書に見られるような, 定義, 公理, 定理, 証明などにより構成される論証形式)ではなく, 通常の著述形式を取る。ただし, 第一付録は幾何学的形式で書かれている。オランダ語による二種の写本(「写本A」, 「写本B」)のみが現存する。これらは19世紀後半に, まず今でいうところの「写本B」が, 次いで「写本A」がそれぞれ発見された。ゲブハルト版は, ロッテルダムの法律家・詩人のアドリアン・ボハールス(Adriaan Bogaers)により, 1861年に発見された「写本A」に基づく。cf. Baruch de Spinoza, *Kurze Abhandlung von Gott, dem Menschen und dessen Glück*, auf der Grundlage der Übersetzung von Carl Gebhardt, neu bearbeitet, eingeleitet und herausgegeben von Wolfgang Bartuschat, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 1991, SS. IX-XXXVIII (Einleitung); Lewis Robinson, *Kommentar zu Spinozas Ethik*, Leipzig: Verlag von Felix Meiner, 1928, S. 5 ff., 152 ff.; スピノザ(畠中尚志訳)『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』岩波書店(岩波文庫), 1955年, 9-38頁。
- (23) 『知性改善論』は序論を持たない主著『エティカ』の序論的性格を持つ著作である。ラテン語により通常の著述形式で書かれている。スピノザは, 当初, 知性の改善を論じる部分と形而上学を論じる部分とからなる「まとまった小品(integrum opusculum)」を予定していたが, 知性の改善を論じる部分のみが, しかも未完成の形で残されたのが本書である。cf. 「書簡6」(*Spinoza Opera*, vol. IV, SS. 15-36), Robinson, op. cit., S. 11 ff. なお, 1677年2月にスピノザが没し, 同年12月に友人の手により, 他の著作(『エティカ』, 『政治論』, 『ヘブライ語文法綱要』, および書簡)と共に本書は『遺稿集(*Opera posthuma*)』として出版された。この『遺稿集』には発行所も発行者も記されておらず, “B. d. S.”というベネディクトゥス・デ・スピノザ(Benedictus de Spinoza)の頭文字だけが記されている。スピノザの名前が明示されなかったのは, 真理は万人のものであるから個人に帰せられるべきではないというスピノザの遺志による。なお『遺稿集』は翌年, 禁書となった。
- (24) 『幾何学的方法で証明されたルネ・デカルトの哲学原理』は幾何学的形式を取り, 付録の『形而上学的思想』は通常の著述形式(非幾何学的形式)を取る。両者ともラテン語で書かれている。スピノザが生前に自身の名を冠して出版した唯一の著作である。1662年, スピノザは当時同居していたレイデン(Leiden)大学神学科学士のヨハネス・カセアリウス(Johannes Casearius, 1642-1677)に, デカルト(René Descartes, 1596-1650)の『哲学原理(*Principia philosophiae*)』(1644)の第二部(と第三部の一部分), および新スコラ学の講義を行った。スピノザが彼自身の学説を教え

- なかったのは、カセアリウスがまだ若かったためである。友人の勧めにより、1663年に、これに更にデカルト『哲学原理』の第一部の解説を加え、出版したものが本書である。なお、スピノザはこの第一部の増補を二週間内で仕上げたという。cf.「書簡8」(*Spinoza Opera*, vol. IV, SS. 38-41), 「書簡9」(ibid., SS. 42-46), 「書簡13」(ibid., SS. 63-69), 「書簡15」(ibid., SS. 72-73).
- (25)『神学・政治論』は、1670年に偽りの出版地、偽りの出版者、そして匿名で出版された。ラテン語により通常の著述形式で書かれている。スピノザの存命中に出版された彼の著書は、『デカルトの哲学原理』と本書の二冊だけである。本書執筆中、スピノザは、ほぼ生涯をかけて完成される主著『エティカ』の執筆を中断している。『神学・政治論』は瀆神の書とされ1674年には禁書となっている。本書に対する悪評、非難により、スピノザは世に広く知られるようになるが、それは1675年に完成する『エティカ』の出版をスピノザが断念せざるを得なくなる理由ともなっている。1656年のユダヤ教会からの破門の際に、スピノザが書いた「弁明書」に、『神学・政治論』の淵源があるとされる。このことをピエール・ベール(Pierre Bayle, 1647-1706)は『歴史批評辞典(Dictionnaire historique et critique)』の「スピノザ(Spinoza)」の項の中で次のように伝えている。「スピノザは会堂脱退の弁明書をスペイン語で著わした。この文書は印刷されなかったが、後に『神学・政治論』で日の日を見る多くのものがそこに盛られていたことは知られている」(野沢協訳『ピエール・ベール著作集 第5巻: 歴史批評辞典Ⅲ』法政大学出版局, 1987年, 638-639頁)。なお、この「弁明書」は現在、残っていない。スピノザが『神学・政治論』において、宗教が人間を支配してはならないとし、政治の役割を人間の自由を守ることであるとするには、当時のユダヤ人社会に渦巻いたユダヤ教会の不寛容さとオランダ社会に渦巻いたカルヴァン派の不寛容さへのスピノザの抵抗が見られる。また、スピノザが自由な思想を持つコレギアント派の人々と接触を持ったことにも注目する必要がある。
- (26)『エティカ』はスピノザの主著と見なされている。ラテン語により幾何学的形式で書かれている。1675年に完成するが、生前の出版は適わず、スピノザの死後、『遺稿集』に収められ出版される。なお、「エティカ(ethica)」とは「倫理学」の意味であり、本書は最終的に人間の完成を説く。
- (27)『政治論』はラテン語で書かれ通常の著述形式を取る。本書においてスピノザは、人間の自由が侵されないようにするために国家がいかに組織されねばならないかを説く。『エティカ』の完成後に、友人の勧めにより執筆をはじめますが、スピノザ自身の死のために未完。死後、『遺稿集』に収められ出版。ゲブハルト版の番号づけによるところの「書簡84」は、『政治論』の執筆をすすめた友人に対しその構成と執筆状況を伝えた書簡であるが、『遺稿集』の編集においてそれは(書簡の箇所にではなく)『政治論』の冒頭に序文のような形で置かれた。ゲブハルト版においては『書簡集(Epistolae)』の中にも(*Spinoza Opera*, vol. IV, SS. 335-336), 『政治論』の冒頭にも(ibid., S. 272), 共に所収されている。
- (28)『ヘブライ文法綱要』はスピノザの手によるヘブライ語の文法解説書である。ラテン語で通常の著述形式で書かれている。『エティカ』の完成後に執筆。未完である。スピノザの死後、『遺稿集』に収められ出版される。なお、この著作にスピノザの思想の反映を読み取ろうとする研究もある。註の(35)を参照。
- (29)「虹の代数計算」は光学に関する短い論文である。オランダ語で通常の著述形式で書かれている。『エティカ』の完成後に執筆。スピノザの死後10年経ち発見される。
- (30)「機会の計算」は機会 kans(一種の確率)に関する短い論文である。オランダ語で通常の著述形式で書かれている。『エティカ』の完成後に執筆。スピノザの死後10年経ち発見される。
- (31)『遺稿集』では、元々オランダ語で書かれた書簡も、スピノザ自身その他によるラテン語訳版の書簡を収録し、全てラテン語で出版されている。ゲブハルト版では、どちらを採用すべきに迷う二つの版がある場合、その両者が収録してある。『遺稿集』には、『政治論』冒頭に置かれた書簡一註の(27)参照—を含め、全75通の書簡が収められている。ゲブハルト版では、これに更に11通が加えられ、全86通の書簡が所収されている。cf. *Spinoza Opera*, vol. IV, S. 365 ff., 梶中尚志訳『スピノザ往復書簡集』岩波書店(岩波文庫), 1958年, p. 423 ff.
- (32)彼らは自由な聖書解釈を行った。註の(25)参照。

- (33) スピノザは、1632年にアムステルダムに生まれるが、1656年にユダヤ教会から破門された後に、アムステルダム南部から10キロ程離れた寒村アウデルケルク（Ouderkerk）に一時住み、1660年からレインスブルフに移住している。1656年から1660年までのことは、伝記資料がないために、詳しいことは分かっていない。破門理由についてもはっきりしない。スピノザの伝記、史料については、J. Freudenthal, *Spinoza. Leben und Lehre*, Heidelberg: Carl Winter, 1927（J. フロイデンター著・工藤喜作訳『スピノザの生涯』哲書房, 1982年）、J. Freudenthal (Hrsg.), *Die Lebensgeschichte Spinoza's in Quellenschriften, Urkunden und Nichtamtlichen Nachrichten*, Leibzig: Verlag von Veit & Comp. 1899を参照。
- (34) 「虹の代数計算」は光学の問題を、「機会の計算」は機会 kans（一種の確率）の問題を数学的に扱っている。ここでは、広い意味で「自然科学論」としてこれらを括ることにした。
- (35) こうした視点からの研究として、例えば、鈴木雅大「の変様、の観念」（『現代思想 スピノザ』vol. 24-14, 青土社, 1996年, 151-159頁）がある。そこでは、『ヘブライ語文法綱要』においてスピノザが、ヘブライ語の「ヒトパエル態」（「再帰態」）を説明するのに際して、「内在的原因」という言葉を使っていることに注目し、そこに『エティカ』の神の思想を読み取ろうとしている。
- (36) スピノザの書簡の中には、例えば硝石の実験をめぐる書簡など、自然科学をテーマにしたものが見出だされる。こうした書簡を見る限り当時の科学的議論にスピノザが無関心ではなかったことが窺い知られる。しかし、生前彼が実際に力を注いだのは人間形成論と政治論に対してであった。
- (37) 《quo homo a nobis magis liber conciperetur, eo magis cogeremur statuere, ipsum sese necessario debere conservare, . . . , quod facile unusquisque, qui libertatem cum contingentia non confundit, mihi concedet.》
- (38) ブラケット [] 内は筆者による

（博士後期課程1回生，教育学講座）